

「行光」鑑定の幅の広さについて

伊藤三平

先日、ある目利きの方とお話している中で、「やはり現物を並べての比較が一番わかります」という話になり、私もそれは肯定するのだが、来国光と栗田口吉光を目の前に並べてもらって手に取って比較しても、この目利きの方が「違う」という来と栗田口の地の色がわからなかった私である。「相州行光と当麻も並べて比較すればわかります」と言われても簡単には同意して、迎合するわけにはいかない。(実際に自分のものにして、あらゆる機会に比較すると地色の違いがわかってくるかもしれないことは否定しない。これが高い金を出して買うことのメリットである)

私は、相州行光に極まっている刀の芸術性を否定するものではない。当麻も同様で、さすがと思えるものを拝見してきた。ただ、特に無銘の短刀で相州行光極めが常識を外れて多すぎることを、私のHP「日本刀・刀装具の研究」の中に「日本刀の研究ノート」の「短刀名作者の現存本数」(2010年6月11日)で指摘し、一つの実証例を定量的にPDFファイルにまとめ提示している。(http://www.mane-ana.co.jp/katana/tantouhikaku.pdf)

今回は、行光のことを鑑定家がどのように見所を述べているかを整理した。

1. 本間薫山氏の見解

相州伝の鑑定と言え、近年では本間薫山氏である。その本間薫山氏も、行光が相州伝の名刀鑑定における避難港であることは認めている。

「だから極める時もどこにもって行けばいいかわからん物で、相州物の上作だと「行光」と逃げる訳です。行光は相州上作の避難港です。」(『日本の美術 正宗 相州伝の流れ』本間薫山編の中の末尾の本間薫山の談話「相州伝聞書抄」より)

『薫山刀話』(本間順治 著)には「行光の粹 正宗の粹」として、今後の課題を刀剣界に提示している。

「相州伝のもので、正宗とか、貞宗とか、広光、秋広とか、いわゆる正宗十哲とされているような作はだいたいわかりますが、どうしてもそれらの作には、ずばりとはあてはまらない上々作を、なぜか一括して行光に極められている感があります。しかしそれらのいずれもが、それでよいかどうか、もう一度考え直さなければならない作が、まもあるのです。室町時代以来の古剣書をみても、行光の作域はかなり広い。直刃もあるし、乱刃もあるし、時には皆焼もあると書いてあります。それでよいのかもしれないが、さらに検討してもらいたいのです。」

2. 『日本刀の掟と特徴』（本阿弥光遜著）での区分

具体的な鑑定になると『日本刀の掟と特徴』が各書の底本になっているが、抜き書きして比較表を作成すると下記の通りである。似ている箇所に線を引いている。

| | 当麻国行 | 行光 |
|------|--|---|
| 造込格好 | 鎌倉中期太刀姿と猪首切先太刀姿のものもあり、いづれも品位が高い。(一門は鎌倉末期から南北朝とあり、行光と同様もあると思われる) | 鎌倉末期の太刀姿で品位が高い。又切先が延び三期(南北朝期)に近いものもある。 |
| 樋・彫刻 | まれに棒樋、二筋樋もある。 | 棒樋多く、樋の形正しく樋先は下る。 |
| 刃文 | 焼巾の狭い沸本位中直刃ほつれ、沸荒く二重刃多く、又喰違刃などがあり能く働き、打のけ、稲妻、金筋などが小模様掛る。焼巾の広いものに出来の勝れたものがあり、直刃丁字乱で、沸ことに荒く華やかに稲妻、金筋が大模様交り、刃中沸匂凝って足入り、刃表の色は深味があり淡雪の積もれるごとく、相州行光又は越中郷義弘の作柄によく似ている。物打より横手下鉈子に掛るあたりに稲妻が多く現れる。 | 焼巾の狭いものは、沸本位中直刃ほつれで小丁字乱れ小乱れ交り、沸荒くその光強く刃縁、刃中とも能く働く。小模様の稲妻、金筋が交る。焼巾の広いものに出来の勝れたものも多く、沸本位大乱、湾乱、大互の目乱、直刃丁字乱など総べて沸崩れて刃縁がことに働多く、焼巾の狭いものより一層沸は華やかに稲妻、金筋が交る。刃中ことに働き強く沸匂凝って見所多く、刃表の色合に深味がある。 |
| 鉈子 | 刃文の儘入り、シッカリとして焼詰が多い。 | 小丸、大丸、乱込みなど総べて沸で品よく崩れ、火焰になるもの、又焼詰のものもある。 |
| 地鉄・肌 | 能く練れて細かく板目肌交じりチケイ、湯走があらわれ、板目肌の先は図のごとく柾目に流れる。之を当麻肌という。(図省略) | 能く練れて山城粟田口のごとく、地中に潤いがあり、地沸、湯走深く、湯走は丸味を持ちチケイがあらわれる。 |
| 中心 | | 現存のものは大磨上が多く、在銘は未だ経眼しない。 |

『日本刀の掟と特徴』 本阿弥光遜著 より

「地鉄・肌」の項における”当麻肌（板目肌の先が柾目に流れる）”が見つければ、区別になるが、そうでない場合は区別が付かないというのが、本当ではなかろうか。

もっとも、行光で重要文化財指定の三口の刀にも流れ肌があるようであり、始末におえない。

「(文脈から日向内藤家伝来の行光のことだと思うが)地の鍛えは板目で流れごろがある。」(『日本の美術 正宗 相州伝の流れ』本間薫山編より、この箇所は加島進氏の執筆)

3. 相州伝の難しさ

今は、「行光」に極まっている方が「当麻」極めよりも人気がある(=価格が高い)ところも問題を複雑にしている。

昔は、「行光」同様に「当麻」も高く評価されているのである。

刀剣名物帳には当麻は、大坂当麻、上部(桑山)当麻、上部当麻、村雲当麻、鉦切当麻とある。行光は佐藤行光、不動、大島行光、後藤行光。

本間薫山氏の問題提起を受けて、「行光」と「当麻」の鑑別、および「行光」そのものの鑑定の見直しをしようと考えても、それぞれにそもそも在銘品がないわけだから、「難しい」というより「できない」のが実態であろう。

同格の美術的価値なのだから、「当麻」の価格を「行光」に近づけるのも一案だが、現在は刀剣の価格そのものが、全体に低下傾向にあるから、そんなことをしても買う人がいないだけである。むしろ「行光」を「当麻」価格にと言われるだけだ。

『日本刀の掟と特徴』(本阿弥光遜著)による比較表の当麻国行の「刃文」の項には「相州行光又は越中郷義弘の作柄によく似ている」とある。

当麻=行光=義弘の区別も、そもそも怪しいのが実態なのだ。これが相州伝。

さらに『薫山刀話』(本間順治著)の「鑑定家の避難港(一)千手院と当麻 一伝当麻と包永一」には次の一文がある。

「手搔、保昌、尻懸派には在銘の作が多いから、まずよろしいとして、千手院と当麻となると、かなり異論のでてくる作があります。在銘が極めて少ないということが、まず問題の起点になりますが、いちおう大和物とみて、鎌倉初期を下らないという刀は、年代的にみてまず千手院といっても差し支えない。これは作風からいうのではなく、年代的にみて、その当時はいまだ他の四派は、発生していなかったからであります。ところが鎌倉中期及び末期の、大和物を見分ける場合は、そうはいきません。それらの客観的な見地はというところむずかしいが、当麻の古極めものをみると、非常に地刃もよく沸えて、地景金筋が目立ち、ままた相州行光に紛れるものがあります。一中略一ところがこれとは別に、初代手搔包永の在銘の作にも、そういう烈しい沸えづきの作が稀にあります。」

『薫山刀話』（本間順治 著）の「鑑定家の避難港(一)千手院と当麻 一伝当麻と包永一」より

当麻と手搔包永だって区分は怪しいのだ。

畏友のH氏は備前伝の名刀をお持ちだが「今は相州伝の匂に包まれた沸の輝くさまがなんとも言えず好きです」と言われ、相州伝礼賛派でもある。

もともと、H氏は相州伝の名刀は所持されていない。言葉と行動は違っているのだ。伊藤は思う、H氏は、ご自分なりの相州伝名刀の基準を持たれているから、まだ基準に合致するものに出会わないのだ。目利きのH氏でさえ、そうなのだ。自分なりの相州伝の基準を持たない内に、山岡重厚氏が言うところの確信性がない相州伝名刀を名前だけで買うのはどうかと思う。

ただ、「相州伝は信仰」と割り切り、“信心”で買うのも一案である。「極め」を誰も明確に否定はできないのだ。肯定する根拠も無いかわりに、否定する根拠もないのだ。信じている方が強いのだ。

でも、いいのだろうか。なんか刀剣界は、本間薫山氏が問題提起をした昭和後期よりも退化しているような気もしている。